

## 教会を建て上げる秘訣

2009. 4. 7(火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

マタイによる福音書 16章13節から25節

さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。

みことばを宣べ伝える兄弟たちはみな分かるでしょうが、メッセンジャーは出かけると、何について話したらいいのか、みんな迷っているのではないかと思うのです。僕も、今回神戸に行ったら「主の教会を建てる秘訣」について話すべきだと思っていましたが、向こうに行ってみると、400人以上が集まり、救われていない人もいましたので、このメッセージが適切かどうかと非常に迷ったのです。けれど、二十何人の人々が祈るようになり、初めてみことばを聞いた人も祈るようになりました。ですから、教会を建て上げる秘訣に

ついて話したのです。それで良いのではないかと思っていたのですが、そのメッセージを聞いた人々が、「やはり、このメッセージは吉祥寺でも話さないとだめですよ」と。また、「そのメッセージは何度聞いても良い」と言うので、僕が譲ったのです。(笑い) 確かに、吉祥寺のためにも、全国の集会のためにも、必要なメッセージではないかと思えます。

イエス様は、いつもはっきりとした目的を持っておられました。この時代にどのような目的を持っておられるか、イエス様は前からもちろんよくご存じでした。イエス様は目的をお持ちになって、目標を目指して死に向かって進んで行かれました。

今の時代は、「教会の時代」と言われています。或いは、「恵みの時代」とも呼ばれています。恵みの時代の後の時代は、「さばきの時代」になります。この恵みの時代はいつ始まったかと言いますと、「五旬節」のときです。いつ終わるかと言いますと、「空中再臨」のときです。ですから、今は非常に大切な時です。

なぜあちこちで、いろいろな人々が導かれるようになるかと言いますと、先にイエス様に出会った人々が新しく救われた人々に対して無関心ではないからです。イエス様を待ち望むとやはり、救われていない家族、親戚、友人たちのために祈らざるを得なくなるのではないかと思えます。

つまり、信じる者の中に二種類あります。イエス様がいつか来られるけれどいつになるか分からない。そのような態度をとる信者がいます。その態度は根本的に間違っています。イエス様は今日来られるかもしれない。朝目が覚めた時、もしかすると今日おいでになるかもしれないと考える信者とは、違うのではないかと思えます。

イエス様はいつもはっきりとした目的を持っておられました。イエス様は死なれたのち三日目によみがえられ、今、天の御位に座しておられますが、イエス様はそこで休んでおられるわけではありません。イエス様はそこから御霊を送り、ご自分の目的を完成しようとなさっておられます。

イエス様が望んでおられる目的とは、いったい何なのでしょう。それは、イエス様ははっきり言われたように、「わたしはわたしの教会を建てよう」というみことばに表わされています。イエス様のご目的は、ご自分の教会を建て上げられることです。

イエス様がこの時代になさろうとしておられるこのみわざを、悪魔ももちろんよく知っています。もし知っていなければ、このようにこのみわざに反対し、逆らうはずがありませんから。しかし、イエス様はかつて次のように言われました。「わたしはわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない」と。

この教会を見せられ、今まで幾世紀もの間生きた人々は、驚くべき激しい教会に対する悪魔の働きをも見てきました。イエス様とつながっている人々は、いつの時代でも「組織されたキリスト教会」によって迫害されたのです。悲しいことですが本当なのです。

もしイエス様が、私たちの心の目を開き、ご自分の目的である教会を私たちに示すことがおできにならないなら、私たちに、「わたしの心になつた者である」というみことばを

かけることは決しておできにならないでしょう。

私たちの目的とはいったい何なのでしょう。悪魔がイエス様のご目的を絶えず心に留めているように、私たちも主のご目的をいつも心に留めて考えているのでしょうか。多くの人々は、滅びゆくたましいを主のみもとに導いて、それを一つの組織、団体に導き入れ、それで満足しています。しかし、イエス様はそれで満足なさっていません。何年も前に、茨城県的那珂湊にいた時代だったのですが、ある姉妹が私に次のように言ったことがあります。「私の一番好きなことばは、エペソ書1章23節です」と。そのとき那珂湊でもいつも、主のからだなる教会が建てられるようにと祈り続けていましたが、団体としては違う意見を持っていたので、僕は離れたのです。そのとき、今後どこに住むことができるか分からなかったし、小さい子どもも五人いました。けれどもやはり、「みこころに従いたい」と思い、「団体から離れる」決心をしました。

エペソ人への手紙 1章23節

**教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。**

素晴らしいことばです。ちょっと理解できません。静かなところで、このエペソ書1章15節から23節を、「主よ、どうか私の心の目をお開きになってください」と祈りながら、お読みになってください。

三つの点について、一緒に考えたいと思います。

第一番目、三つの大切な点について。

第二番目、重要な質問について。

第三番目、必要な材料について。

\*第一番目。三つの大切な点とは、いったい何でしょうか。

「教会を建て上げる秘訣」について、まずどうしてもはっきりとさせておかなければならない、三つの大切な点をあげて考えてみるべきだと思います。三つの点とは、

- ① 新しい土台を持つこと。
- ② 十字架がどうしても必要であること。
- ③ イエス様の絶対的なご支配。

① 教会は新しい土台を持っているということです。

イエス様ご自身は、「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われましたが、それはどこで言われたみことばなのでしょう。マタイ伝16章13節を見ると、それは、ピリポ・カイザリヤの地方であったことが分かります。この地方は、首都エルサレムから最も遠く離れた地方です。またこの地はガリラヤ湖の北端に位置しています。このピリポ・カイザ

リヤの地で、イエス様はご自分のご目的である「わたしはわたしの教会を建てよう」というみことばを宣べられたのです。なぜこの地方で言われたのでしょうか。それは、ご自分のこの目的が、今までの古い伝統とは何の関わりもない、全く新しいものであることを教えるためにほかなりません。それまでユダヤにおいては、宗教、組織として宮にまつわるいろいろな古い伝統がありました。しかしイエス様は、ご自分の教会をこのような土台の上には建てないとおっしゃるのです。教会はイエス様の教会でなければなりません。ですから、イエス様は新しい土台をお建てになったのです。

この土台は、言うまでもなく「イエス様ご自身」です。ペテロは、イエス様にはっきりと、「あなたこそ生ける神の御子キリストです」と申し上げました。教会がイエス様の教会でなければならないのなら、その教会は肉の欲によらず、血筋によらず、人の欲にもよらず、ただ主なる神によって生まれたものでなければならないはずですが、したがって、教会は決して一つの組織であるべきではないはずですが、人間は一つの宗教的なクラブをつくってそこで聖書を学ぶことはできますが、それは決して主のからだなる教会とは言えません。教会は、主によって生まれた一つの生きた有機体であるべきです。伝統や人の力によって生まれ、人の努力、この世の力によって支えられていく教会は、本当の教会とは言えないわけです。

「あなたは生ける神の御子キリストです」とのペテロの告白は、教会の秘密を解く鍵のようなことばです。このことばは、教会のかしらがイエス様であることを言い表わしています。教会のかしらであるイエス様は、上から来られたお方ですから、主イエス様のからだである教会も、上から生まれたものでなければならないことは言うまでもありません。

教会という意味は、「この世から召し出されたもの」という意味です。したがって、教会はこの世に関わりを持ったり、興味を持って良いはずがありません。

教会を建て上げていくために、新しい土台が必要であることを述べてきました。

② 十字架がどうしても必要であること。

ピリポ・カイザリヤ地方は、地理的に首都から離れた地方であるばかりでなく、霊的にも一つの意味があるのです。イエス様はこの地方で初めて、ご自分が十字架にお架かりになることを明らかにされました。

マタイの福音書 16章21節

その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。

とあります。

どのようにして、主イエス様はご自分の教会を建て上げていかなければならなかったのでしょうか。「多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえる」と、イエス様ご自身が言われたのです。イエス様とともに教会を建て上げるために働こうとする者は、教会を建て上げるために、「イエス様は死に渡されなければならなかった」ということを知らなければなりません。イエス様をご自分のいのちを捨てられたことによって初めて、教会を建て上げることがおできになりました。ですから、イエス様とともに十字架につけられた者だけが、イエス様とともに働く者となることができると言えましょう。

人間の努力によって新約聖書の教会を考え構想を練ることが、教会を建て上げるために大切なわけではありません。何にもまして大切なのは、「イエス様とともに十字架につけられて、この身が死に渡される」ということです。私たちは、パウロのように、「私はキリストとともに十字架につけられた。生きているのはもはや私ではなく、キリストが私のうちに生きておられるのである」と言えるようにならなければなりません。

イエス様の教会を建て上げるために必要なのは、いわゆるご奉仕ではなく、「十字架を背負って主に従う」ことです。

マタイの福音書 16章24節

**それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」**

いつ教会が建て上げられるのでしょうか。それは、人々が、私たちが、主のみこころは何であるかを知り、このためにはどんなに悩んでも苦しんでも誤解されても良いと覚悟を決めるとき、主の教会が建て上げられて行きます。多くの人々は、熱心に主のために働き仕えようとしますが、「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われる主のみこころを深く知っていません。これは一つの悲劇と言わなければなりません。またある人は喜んで真理を宣べ伝えますが、主の十字架を担ってイエス様にどこまでも従おうとしません。「収穫は多いが、働き手が少ない」というみことばがありますが、今ある一番の悩みは働き人の少ないことではありません。働き人の「量より質」が、問題です。

### ③ イエス様の絶対的なご支配

イエス様は、ご自分の教会の土台を据えるために死なれました。私たちは「主とともに十字架につけられ」、すべてを主に明け渡すとき初めて、主とともに主の教会を建てることができるのです。イエス様は決して、「わたしは一つの教会を建てよう」と言われませんでした。「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われました。イエス様は私たちがイエス様とともに教会を建て上げることを許していただきましたが、その教会をいかなる人間も自分のものとして所有することは許されません。主の教会はあくまで主の教会であり、所有権は主にあります。イエス様はご自分の教会を一つのミッションのために、一つの団体のために、一つの組織のために、一つの国民のために建てよう、とは言われなかったのです。

イエス様はご自分のために教会をお建てになります。多くの人は、私は主のために働いている、教会の責任を持っている、と言いますが、人間は教会を主に与えることはできません。イエス様はご自分の教会をご自分がご自分に迎えると言われます。この集会のある兄弟たちは時々変なことを言います。今から「この集会の責任者であるベック兄」に話していただきます、と。これはおかしいです。教会を建てるお方に仕えたい、しもべであるベック、と言ったほうが良いのではないのでしょうか。責任者はイエス様でなければお終いです。全くおかしいです。ですから以前も話しましたが、五年前に病気になったとき、ある人が、そろそろ跡継ぎを決めなくては…、と。それを聞いたときショックでした。このように考えている人は、イエス様のからだなる教会はどのようなものであるか全く分かっていません。ベックの集会だったら、跡継ぎが必要です。主の集会だったら、跡継ぎなど笑い話です。不信仰の表われそのものです。

エペソ書5章27節を見ると、次のように書かれています。

エペソ人への手紙 5章27節

**ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。**

教会の所有権は、一つの組織、一つの国民ではありません。教会はただイエス様のものです。教会は、ある宣教師、ある牧師のものではなく、隅から隅まで主のものです。教会は「聖霊の宮」、「主なる神のみ住まい」、「御子イエス様の花嫁」です。

パウロは老年になってから殉教の死を遂げる前に、愛弟子であるテモテに書いたのです。テモテへの手紙・第一 3章15節

**それは、たとえ私がおそくなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。**

「神の家でどのように行動すべきか」、これこそ、考えられないほど大切なのです。

このみことばを読むと、私たちにとって大切なのは、どのように教会を導くか、どのように教会を治めるか、どのように教会を助けるか、などということではなく、自分自身主の家でいかなる生活を送るべきかが大切である、ということがよく分かります。

教会は、主の家であり、主ご自身がそこに住んでおられます。教会は隅々まで主のものです。したがって、教会を支配したもうお方はイエス様だけであるべきです。イエス様は教会のお客様ではなく、教会のかしらであり、支配者であられるのですから、教会は、主のみこころを行ない、イエス様の願いを満たしていかなければならないはずのものです。

ここまで、どうしても知らなければならない三つのことをともに学んできました。

・その一は、教会の土台は伝統や組織ではなく、新しい土台、イエス様ご自身であること

を見てきました。教会のかしらであるイエス様は天から来られましたから、からだである教会も上から生まれたものでなければなりません。教会は天的な有機体として、地のものとは何の関わりも持たないものです。

- ・次に、教会は、キリストとともに死に、日々イエス様の十字架を担ってイエス様に従って行くものだけがこの教会建設のみわざに参加することができる、ということも見てきました。
- ・そして、教会の特徴は、イエス様だけがご支配なさるべきである。私たちの場合もある人、ある組織、団体、教派のものではなく、隅から隅まで主のものであるべきはずです。

\*第二番目 重要な質問について。

私たちはイエス様とともに働く者でしょうか。それとも、イエス様の働きを妨げる者でしょうか。このことについてちょっと考えてみましょう。

私たちはイエス様のことばを何度も読みました。「わたしは建てる」。あなたがたはどうできないから。「わたしはわたしの教会を建てよう」ということは、イエス様だけがこの霊の宮を建てることがおできになる方で、どんな人間もこれを建てることはできません。私たちは主とともに働くことができます。けれど優先権は常に主にあるべきです。人間が自分の思い通りに、ここ、あそこに教会を建てよう、ということではできません。パウロでさえも、自分で教会を建てることはできなかったのです。

パウロは、タルソの町に生まれました。この町は大きな都市でした。パウロはこの町でも証しをし、伝道したに違いありません。人間的な考えでは、この生まれ故郷に教会を建て上げたかったに違いありません。けれどパウロの時代にはできませんでした。パウロは後にバルナバに導かれて、タルソからアンテオケに行き、そこで素晴らしい教会を建て上げることができました。もちろん主がお働きになったのですが、これを読んでも、パウロは自分がどこで働くかということさえ、主の導きによらなければならなかったのであり、自分では好きなところを選ぶことができなかったのです。

パウロは、主のご目的と主のご予定をよく知っていました。イエス様をご自分でご自分の教会をお建てになることを知っていました。ですから、パウロはイエス様にその身をまかせ、導いていただき、「我、もはや生きるにあらず。キリスト我がうちにありて生きるなり」という態度をとり続けたのです。私たちも、パウロと同じように主とともに働く者になりたいものです。もし主のみわざの邪魔をし、用いられないような状態になったなら、まことに悲しむべきことであり、わざわざいと言わなければなりません。

主の御手を縛り、主のわざを妨げる三つのことがあります。

- ① 自己中心の霊
- ② 二つに分かたれた霊

### ③ 狭い心、狭い他を入れない霊

#### ① 自己中心の霊

イエス様はあなたを建て上げるとは言われませんでした。「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われたのです。もちろんイエス様は私たちに祝福してくださいますが、それはなぜかと言いますと、他の人々に私たちを通して祝福が及ぶための祝福なのです。もし、私たちが自分たちだけの祝福を願い求めるならば、それは主の教会を建て上げようとなさるその御手を縛り、主のみわざを妨げることになります。イエス様が「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われたとき既に、「すべてを捨てて」イエス様に従ったペテロは、そのときイエス様のみわざを妨げようとしてしまったのです。ペテロは自分のことばかりを考えていました。イエス様が十字架に架からなければならないと言われた時、もしイエス様が十字架で死なれたなら、自分も困ってしまう。そこでイエス様に十字架には架からないでくださいと頼みました。このようにペテロは、自分のことを中心に考えることにより、イエス様のみわざを妨げてしまう結果になってしまったのです。前に読みました箇所を見ても分かります。イエス様は非常に悲しくなられただけでなく、悪魔よ退け、と仰せにならざるを得なかったのです。

#### ② 二つに分かたれた霊

妥協することなく主に従わなければなりません。主の恵みによって導かれ救われた人々は、互いに平和の絆をもって結ばれ、愛の交わりがなければ、教会は建っていきません。これは決してたやすいことではありません。まことの愛を持つことは難しいというよりも、不可能ではないでしょうか。しかし、私たちは自らの難しいことに目を留めず、主の恵みがそれをなしてくださることに目を留めていきたいものです。いわゆる、一致を図るために真理を曲げることはできません。主のみこころと反対の思いを持っている人々と妥協してまで交わっていくこともできません。けれど、どのような真理のためでも、兄弟姉妹に対して愛のない態度、愛のない立場をとってはなりません。たとえ他の兄弟姉妹が自分の考えと違う考えを持っていても、その人の上に立ってその人をさばくようなことがあってはなりません。絶えず愛を持って、平和の絆を持って、一つの霊に結ばれていかなければなりません。これがまことの愛であり、この愛なくして、イエス様の教会は建っていきません。教会を建て上げていくことは決して簡単なことではありません。

#### ③ 狭い心、狭い他を入れない霊

狭い霊は、イエス様の教会を建て上げる邪魔になります。主の御目はあまねく各教会を見渡し、ご自分の教会を建てようとなさっておられますが、主は、わたしはわたしの多くの教会を建てよう、とは言われなかったのです。「わたしはわたしの教会を建てよう」と、一つの教会を建てようと願っておられるのです。このイエス様の言われる一つの教会は、世界的なものです。ある人は日本の教会を建てようと考えています。そして日本人でない

者は外国人として、日本の教会から閉め出そうとする人もいます。これらの人々は、日本の教会は日本人が責任をとるべきだと考えていますけれども、教会はある特定の国民のもので、個人のもので、団体のものでもなく、教会はただイエス様のものであることを知らない人々です。まことの教会が何であるか心で見ることができなければ、主のまことの働き人となることはできないでしょう。狭い霊は、主の御手を縛り、その働きを妨げます。

#### \*第三番目。必要な材料

教会を建てるためにはどのような材料を使ったら良いのでしょうか。それはペテロのような男を使う必要があります。イエス様はペテロに「あなたはペテロである」と言われたすぐその後で、「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われたのです。ペテロは上からの啓示によってイエス様がどのようなお方であるかを教えられ、ペテロという人間は変えられていきました。ペテロのように上からの啓示によって主を知った人々を、主は教会を建てる材料としてお用いになることができるのです。

マタイの福音書 16章17節

するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」

イエス様は、ペテロをいつも、ヨナの子シモンと呼んでおられました。ペテロの父親のヨナはどんな人だったのでしょうか。聖書はペテロの父親について何も教えていません。それを知っている者は誰もいません。シモンは、誰も知らない、知られていない人の子でした。名もない人でした。主はこのように取り柄のない人を、教会を建てるためにお用いになります。

イエス様は、シモンの「生まれつきの力」が、主のみわざを助けるどころか、主のみわざの妨げになるので、彼を召し出すことができませんでした。イエス様はペテロの生まれながらの人を見ないで、このだめなペテロをご自分の恵みによって造り変えることができることをよく知っておられました。シモンは、ヨナの子シモンのままではいませんでした。やがて彼は変えられ、主に「汝はペテロである」と呼ばれるようになったのです。ペテロは、キリストにある新しい人間に生まれ変わりました。ペテロはイエス様に、「あなたは生ける神の御子キリストです」と言いましたところ、イエス様は彼に向かって、「わたしもあなたに言う。あなたはペテロである」と言われました。

人の心はイエス様を知ることによって変えられていきます。イエス様は私たちのためにどのようなお方であるか、また私たちにどのようなみわざをなさるお方であるかを知り、それに基づいて歩いていくなら、そのような人をイエス様は教会を建てる材料としてお用いになることができになります。

イエス様はどのような人を、教会を建てる材料として、お用いになることができるのでしょうか。イエス様はペテロのような人を、教会を建てるために用いられます。「あなたはペテロである。わたしはわたしの教会を建てよう」と。

ペテロのような人とは、

- ① 固く立って動かされない人であり、
- ② 強い人であり、
- ③ 霊的な人を言います。

#### ① 堅く立って動かされない人

シモンのような男が、主の恵みによって「ペテロ」と呼ばれる男に変えられました。ペテロという意味は「岩」ですが、岩のように文字通り動くことがないものに彼は変えられたのです。教会を建てるためには、ペテロのようにはっきりとした立場をとる、動かされることのない性格の持ち主が必要です。ペテロはかつて、海の砂のように定まりのない、信頼のおけない人物でした。あるときにはイエス様を思い、次の瞬間には主から目を離し、人のことを思う、といった男でした。

マタイの福音書 16章23節

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

イエス様は、彼に、「バルヨナ・シモン。あなたは幸いである。あなたにこのことをあらわしたのは血肉ではなく、天にいますわたしの父である」と言われたすぐ後に、「サタンよ引き下がれ。わたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」とおっしゃらなければならないような、定まりのない男でした。天からの啓示によって神の御子を知らされた直後も、悪魔の手に用いられるといった有様でした。これは、彼の性格が弱く、まことに信頼のおけない人物であったことを表わしています。

このシモンが、いったいなぜペテロのような経験を通して変えられたのでしょうか。彼は、「十字架」と「五旬節」を経験したからです。私たち生まれながらの人間は、本質的に悪い性質を持っています。その人の持っている一番良い性質でさえも、教会を建て上げることには何の役にも立ちません。私たちはパウロのように、「生きるのはもはや私ではなく、キリストが私のうちに生きておられるのである」という経験を持つことこそ大切です。この経験を得て、全生涯を御霊のご支配のうちにゆだねるのでなければ、シモンのように揺れ動く不安定な砂のような状態にとどまり、決して岩のような確かな歩みをなすことはできません。イエス様はまだ五旬節の経験をしていない弟子たちに、ご自分のすべてをまかせることがおできになりませんでした。ですから弟子たちに、ご自分がキリストであることをだれにも言うてはいけない、と戒められたのです。

マタイの福音書 16章20節

そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。

弟子たちは信頼のおけない自己中心的な人々ばかりでした。私たちはどのようにしたら信頼のおける、固く立った者になることができるのでしょうか。

マタイの福音書 16章24節

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

「だれでも私について来たいと思うなら」、(思わなければ結構です。)けれども、ついて来たいと思うなら…。

ペテロは、十字架と五旬節を通して初めて、岩のように動くことのない者になりました。ペテロは自分で自分を、ペテロ、岩、とは呼びませんでした。この名前は主自らにつけていただいた名前です。自分でどんなに努力しても、自らを信頼のおける人間にすることはできません。しかしマタイ伝一箇所を見てみましょう。

マタイの福音書 26章33節から35節

すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。

「今夜」、二、三時間後です。

マタイの福音書 26章73節から74節

しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる。」と言った。すると彼は、「そんな人は知らない。」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。

イエス様が自らシモンにペテロという名前をおつけになり、そうすることによりご自分がよりゆるぎやすいシモンを、岩のように動かない者に造り変えることができることをお教えになったのです。ペテロの名前だけでなく、その性質が変えられました。これを経験した者を通して、主は教会をお建てになるのです。生まれながらの弱い性質を持ったままにとどまっている人は、主のみわざを妨げ、主の御手を縛ってしまいます。十字架により自己から解放され、聖霊のご支配に身をまかせた人々だけを、主はご自分の教会を建て

るためにお用いになります。もし私たちがこのように造り変えられていかなければ、私たちの交わりは一つのクラブにとどまり、決して教会とはなっていないでしょう。

## ② 強い人

岩のもう一つの特徴は、強いということです。パウロは、「どうか父が、その栄光の富に従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように」と祈っています。もし、私たちが主のみこころにかなった教会でありたいと思うなら、私たちには主からの強さが必要です。シモンはこの主なる神の強さを持っていませんでした。ペテロは、主に全く従おうとしたそのとき、反対のことをしてしまいました。イエス様を三度も否んできました。ペテロ自体そんなに弱い男ではありませんでしたが、ペテロを引きずり下ろそうとする悪魔の力に対抗するためには、十分な強さを持っていなかったのです。五旬節の後も、同じように悪魔の力は強く働いたのですが、イエス様は約束通り黄泉に打ち勝つ教会を建て上げられました。

この戦いは今日まで続いています。私たちはともに一つになって心を合わせて生活し、主にこれこそ「まことの教会である」と認めていただけるような教会に建て上げられていきたいものです。主が私たちを、「十字架」と「ご聖霊様」により強い人としてくださったら幸いです。

## ③ 霊的な人

コリント第一の手紙10章4節を見ると、霊の岩について書かれています。岩は霊であると書かれています。ペテロは肉に仕える信者から霊的な信者に変えられるという段階を通らなければならなかったのです。ペテロは人間の思いで事を成そうとした時、イエス様に邪魔者と呼ばれました。イエス様の教会は、「霊の家」と呼ばれています。

ペテロの手紙・第一 2章5節

**あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。**

とあります。

教会は「霊の家」である以上、それに連なる信者もみな霊的であるべきです。多くの人々は、「霊的」とはどういうことであるか正しく理解していないようです。何か漠然としたものを考えているようです。これは誤りです。イエス様は「霊的」なお方でした。イエス様は心にあることをそのまま口に出され、説教されたことを、身をもって成していられました。イエス様は、父なる神のみこころは、私たちが口先だけでなく、「みことば」に、「みむね」に従順に従うことであることを、自ら身をもって教えられたのです。イエス様が建て上げようとなさっておられる「まことの教会」は、兄弟姉妹が心一つにして、ともに礼拝し祈る人々を言います。このためには、それに連なる肢体である信者一人一人が霊的

でなければならないことは言うまでもありません。「同じ霊」、「同じいのち」、「同じ思い」をもって、御栄えのために心を用いていく者でなければなりません。

ですから、イエス様の教会を建て上げていくことは、第一に、内面的な、霊的な事からであり、外面的な私たちは第二、第三の問題であるべきです。

兄弟姉妹が、御霊に満たされ、日々時々刻々主のみかたちに似せられていくことがまず大切です。このようなものになりたいものです。主の満たしに満たされ、主のみかたちに似せられた教会になりたいものです。そして、イエス様のみからだの一部として、私たちひとりひとりが、イエス様のからだに欠けたところのなくなるまでに満たされていきたいものです。

了